『篆隷萬象名義』小篆研究

大柴 清圓

はじめに
『篆隷萬象名義』（『萬象名義』と略す）の唯一の伝本である高山寺本には、小篆・古文・簡文、そしてこれらの隷定字とその変化した俗字などの様々な字体・字形の文字が存在する。『萬象名義』を校訂するためには、その前提条件としてこれらの種々の文字を正確に把握し、正字と誤字の識別をしなければならない。俗字に関して、筆者は既に報告した1。本稿は小篆に関する分析を行いたい。

筆者の統計に依れば、『萬象名義』には合計して 1013 字の小篆（その内 4 字は重複）が存在する。『萬象名義』所収のこれらの小篆と主に現在最も普及している徐鉈校訂の『説文解字』（大徐本）の小篆を比較するに、両者の異同は凡そ以下の五種に分類することができる。

(1) 『萬象名義』と大徐本の字体（偏旁）が等しいもの。
(2) 『萬象名義』と大徐本の字体は等しいが、懸針体の有無の相違が見られるもの。
(3) 『萬象名義』と大徐本の字体は等しいが、偏旁の位置が異なるもの。
(4) 『萬象名義』の小篆で、大徐本に収めないもの。
(5) 『萬象名義』小篆の偏旁が大徐本の偏旁と異なるもの。

本稿は、主に『萬象名義』と大徐本並びに徐鉈校訂の『説文解字』（小徐本）の間で偏旁の構造が異なる（5）の小篆、並びにその隷定字に関して分析を行いたい。

本論文は筆者の博士学位論文『『篆隷萬象名義』文字研究』（中国国立中山大学、2006）の一章を拡張して和訳し、増補・改変を施したものである。

1 『萬象名義』と大徐本の間で構造が異なる小篆
1.1 奥文字系統と字体が一致する小篆
『萬象名義』の小篆が睡虎地や『詐楚文』などの秦隷と字体を同じくするものは、およそ以下の如くである。小篆は始皇帝が中国を統一した後に、丞相李斯が秦文字の大篆を簡略化して作られた文字とされている故、秦隷に由来すると考えられる以下の小篆の字体が、許慎の原本『説文』の小篆の原型である可能性が指摘される。
1.1.1 「申」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>万象</th>
<th>鬯台</th>
<th>天発</th>
<th>李千</th>
<th>李三</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>夢千</th>
<th>万象</th>
<th>大徐</th>
<th>袁安</th>
<th>碧落</th>
<th>文字</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>神</td>
<td>申</td>
<td>神</td>
<td>神</td>
<td>神</td>
<td>神</td>
<td>神</td>
<td>神</td>
<td>神</td>
<td>神</td>
<td>神</td>
<td>申</td>
<td>申</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高巌寺本所載の小篆において、「申」字に従う小篆は「神」（1.17 オ）・「呻」（2.14 ウ）の二字である。『萬象名義』と小徐本の当該小篆は「申」形を「申」形に従う。一方、唐代の小篆である『呉台銘』懸針篆の「神」字、『古今篆隸文体』著書の「神」字、李陽冰『千字文』の「神」字は同様であり（ただし著書の「申」字は誤写）、大徐本もこれに準ずる「眉」形とする。

しかし、睡虎地の「神」字は『呉』（日甲 133 背）や『呉』（日甲 3）に作る（『睡虎地』：2）。また『樊陽令楊軍碑』の「神」字は『呉』、『華山廟碑』の「神」字は『呉』に（『隸辨』：31）、『司徒袁安碑』の「申」は『呉』、及び『大發神觀碑』「神」字は『呉』に作る。すなわち、『萬象名義』の「申」形は秦隸・漢隸に由来することが知られる。また「呻」字に関しては『萬象名義』及び両徐本は共に「申」形に作る。ここから、唐写本『説文』の「申」形に従う字は皆、「申」形であったと思われる。

1.1.2 「大」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>万象</th>
<th>泰山</th>
<th>三体</th>
<th>李千</th>
<th>李三</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>夢千</th>
<th>泰山</th>
<th>袁安</th>
<th>天発</th>
<th>大晋</th>
<th>碧落</th>
<th>崂台</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>大</td>
<td>大</td>
<td>大</td>
<td>大</td>
<td>大</td>
<td>大</td>
<td>大</td>
<td>大</td>
<td>大</td>
<td>大</td>
<td>大</td>
<td>大</td>
<td>大</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高巌寺本所載の小篆において、「大」字に従う小篆は「天」（1.16 オ）・「豊」（1.39 オ）・「咽」（2.8 ウ）・「椅」（4.3 ウ）の四字である。「大」字の小篆は、「大」形と「豊」形の二種に大別される。上の表において、「豊」形に従うものは、「萬象名義」の「天」・「豊」・「椅」・「咽」、李斯『泰山刻石』の「天」並びに「大」、『西海羌騎司馬』の「豊」、『秦隸王太后観』の「大」、『三体石經』の「天」、『司徒袁安碑』の「大」、『大發神觀碑』の「大」、『大尉元康』の「大」、『碧落碑』の「大」、瞿令問『呉台銘』の「大」、李陽冰『千字文』及び『古今文字譜』垂義箋の「因」であり、「大」形に従うものは、李陽冰『箋書千字文』の「因」並びに『三隸記』の「天」、夢英『箋書千字文』の「因」字、両徐本の「豊」・「椅」・「咽」である。

「大」形に従う「大」字に関して、睡虎地（日甲 145 背）に『呉』（天）があり、『北海相景君銘』の「大」（天）が見られる（『隸辨』：43）。一方、「豊」形に準ずる「大」字に関して、睡虎地（為 11）の「豊」字が『呉』に作る（『睡虎地』：203）、『古老子』の「大」字が『呉』に作る（『古文四声韻』：4.12a）、そして『古孝經』の「天」字が『呉』に作る（『古文四声韻』：2.2b）。
漢字においては、『魏書神文』の許・『孫叔放碑』の許などがあり、顕著な例は『按『説文』奇字唯大従可。亘、摺文は大也。諸碑変著奇。』と云う（『隸解』：9）。しかし上述のように、
睡虎地に既に「冫」形が見られる。
総じて言えば、前漢より早く李斯と『三体石經』の字が「冫」形としている。また咸亨元年（670）建立の『碧落碑』、大暦二年（767）に刻まれた『岣台銘』、『標象名義』すなわち唐写本『説文』の初唐から中唐の時期に位置する三者が共有に「冫」形に作っており、また徳宗（742-805）の時（在位 779-805）に成書したと考えられる『古今文字譜』の坐鎮家の「因」
も「冫」形に従う。そして注目すべきは、八世紀の人物と考えられる李陽冰の『千字文』の中において、「天」字は「冫」形に作るが、「因」は「大」形としていることである。すな
わち、李氏はこの両者を使い分けていると考えられる。一方、両徐本は「大」形に従う「冫」
と「冫」形に従う「冫」を別の部首とするが、「大」字以外の「天」・「戸」・「椅」・「喫」・「因」
に関してはみな「大」形に作っている。
以上から、「大」字以外の「大」旁としても冫（冫）形に従っている小篆の方が古い形態を残していると考えられる。また『標象名義』は録定字においても、冫（琦 1.24 ウ）、冫（1.39 オ）、冫（1.53 オ）、冫（1.86 ウ）、冫（2.24 ウ）のように、皆「冫」字の上部の「大」
旁を「冫」形として「冫」に作る。

### 1.1.3 「冫」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>冫</td>
<td>無</td>
<td></td>
<td>冫</td>
<td>無</td>
<td></td>
<td>冫</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

『標象名義』高山寺所載の小篆において、「冫」字に従う小篆は「冫」（1.20 オ）・「冫」（1.38 ウ）・「冫」（2.9 ウ）・「冫」（2.10 オ）・「冫」（4.3 オ）の五字である。

『標象名義』の五字の小篆は、「冫」旁の四つの「又」形を各々独立させて繋がっていな
いのに対して、両徐本の「冫」旁は四つの「又」形が孤立させずに連接している。

睡虎地（日乙 145）の「冫」字は冫に作つ（『睡虎地』：215）、『史晨諸銘』の「冫」字も
冫に作つ（『隸解』：134）。両字の「冫」は共に『標象名義』と同じく四つの「又」形が
それぞれ分離している。

### 1.1.4 「朝」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>西嶋</th>
<th>李千</th>
<th>李千</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>夢千</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>冫</td>
<td>無</td>
<td>冫</td>
<td>冫</td>
<td>冫</td>
<td></td>
<td>冫</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>嘯</td>
<td>嘯</td>
<td>嘯</td>
<td>嘯</td>
<td>嘯</td>
<td></td>
<td>嘯</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

『標象名義』高山寺所載の小篆において、「朝」字に従う小篆は「朝」（2.13 オ）の一字
である。「朝」は、大徐本の口部に新附として加えられているが、小徐本には収めない。

「朝」の小篆に関して、『標象名義』は「舟」旁の上に二画が見られない。また睡虎地（日
甲 159）の「朝」字は形に作り（『睡虎地』: 104）、漢『西嶽華山廟碑』の「廟」字は
『度尚碑』の「朝」字は形、『北海相君銘』の「朝」字は形に作り（『隷辨』: 49）。これらはいずれも「舟」旁の上部に二画を有さず、『萬象名義』の「朝」字と一致する。
一方、大徐本と夢英『千字文』は、「舟」旁の上に二画を有する。この字形は金文の『膕
異鐘』にすでに見られ、『説文』の部首である「舟」部における右旁の二画に相当する。李
陽冰『千字文』の『舟』の字はこの部分を記し、また同じく李氏『三塚記』の「朝」字にも確認できる。おそらく両徐本の「朝」字は李氏の影響を受けたものと考えられる。

1.1.5 「斎」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>斎</td>
<td>斎</td>
<td>斎</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、斎（斎 1.17 オ）が見られる。当該小篆において、「示」旁の上部に二画が見られる。この横二画は両徐本の小篆には見られないが、戦国・秦『詮楚文』に斎（斎）字があり（『戦国文字編』: 6）、『萬象名義』と同様横二画が観える。故に『萬象名義』の当該小篆は秦文字の系統を引き継ぐ古い字体を留めていることが知られる。

1.1.6 「斎」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>三体</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>嘉</td>
<td>嘉</td>
<td>嘉</td>
<td>嘉</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、嘉（嘉 2.9 ウ）が見られる。当該小篆は「斎」
旁の上部に二画が足されている。「斎」字に関して、睡虎地に嘉（封 66）があり（『睡虎地』: 107）、『桐柏廟碑』に嘉がある（『隷辨』: 24）。『萬象名義』の「斎」字の上部に二画は、これからの秦隷と漢隷の上部の誤写と考えられる。

1.1.7 「音」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>李千</th>
<th>李三</th>
<th>李文</th>
<th>夢千</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
</tr>
<tr>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
</tr>
<tr>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
</tr>
<tr>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
</tr>
<tr>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
<td>璥</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、「音」形に従うものは『揮』（1.23 オ）・『境』（1.27 ウ）・『塲』（1.33 ウ）・『境』（1.34 オ）・『暗』（2.9 オ）・『喩』（2.10 オ）・『職』（2.6 オ）・
「檜」(4.3 オ) の字である。大徐本において「章」字は「従音従十」、「竟」字は「従音従人」、「意」字は「従音従心」と云い、三字ともに「音」に従う。『万象名義』の「音」旁は上部を「立」形に従うが、大徐本は字形を異にする。睡虎地の「音」字は〇(封 54) に作り（『睡虎地』: 36）、また『騾氏鏡銘』の「竜」字は竜となり（『録辨』: 153）、共に『万象名義』の小篆と字体が一致する。

また李陽冰『千字文』の「章」字は〇に作り、この小篆は中央に縦一画が貫かれて「章」形となっている。『万象名義』の隷変字において、この「章」形に従うものは、礎(震 1.47 オ)・礎(形 2.25 ウ)・礎(隷 3.52 オ)・礎(隷 4.47 オ)・礎(隷 4.47 オ)・礎(隷 6.51 オ)・礎(隷 6.184 ウ) などがある。「章」形の「章」字は金文に既に見られ、睡虎地（為 25）の礎(『睡虎地』: 37)、『古文四声韻』: 2.14a)、漢印の『校尉之印章』の礎、『碧落碑』の礎などに現れる。また、『武繋碑』の礎(章)、『校官碑』の礎(形)、『費鳳別碑』の礎(章) にも見られ（『録辨』: 57）、『老子道經』の礎(章) とも等しい（『敦煌俗字典』: 542）。

1.1.8 「言」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
</tr>
<tr>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
</tr>
<tr>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
</tr>
<tr>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
</tr>
<tr>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
</tr>
<tr>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
<td>謀</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『万象名義』高山寺本所載の小篆において「言」字を含むものは、「礎」(1.26 ウ)・礎 (1.26 ウ)・礎 (2.5 オ)・礎 (2.14 ウ)・礎 (2.15 オ)・礎 (1.26 オ)・礎 (2.16 オ)・礎 (6.1 オ) の七字である。「言」字の構造によって、『万象名義』と大徐本の間に異同が見られる。睡虎地（封 91）の「言」字は〇に作り（『睡虎地』: 30）、『万象名義』と一致する。一方、『老子銘』の「言」字は〇に作り（『録辨』: 37）、漢隷の段階で既に「言」形に変化していることが知られる。この「言」形は「音」形の中間の二画が繋がって「一」形に簡略化した俗字である。大徐本のように縦に一画のある「言」字は『伯矩簋』や『中山王簋』などの金文に由来し、李斯の『泰山刻石』や『秦二十六年詔銘』に見られる。『万象名義』の「言」字は睡虎地と同系列と考えられるが、同じ隷文字の系統であるはずの李斯の「言」字の構造が睡虎地と異なっている故、原本『說文』がどちらの字体を用いたのか確定し難い。

1.1.9 「童」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>勺千</th>
<th>春千</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>勺</td>
<td>勺</td>
<td>勺</td>
<td>勺</td>
<td>勺</td>
</tr>
<tr>
<td>勺</td>
<td>勺</td>
<td>勺</td>
<td>勺</td>
<td>勺</td>
</tr>
<tr>
<td>勺</td>
<td>勺</td>
<td>勺</td>
<td>勺</td>
<td>勺</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（87）
『萬象名義』高山寺本所載の小篆において「童」に従うものは、xious (第 139 ウ) の一字である。睡虎地（簿 32）の「童」字はcentrationに作り（『睡虎地』: 37）、『婁壽碑』の「童」字はcentrationに作る（『隸解』: 1）。大徐本「童」項は「従辛、重省聲」を言う。故に『萬象名義』のxiousが右旁中央を「日」形に従うのは誤りであり、「辛」旁の縦一画によって貫かれるべきであろう。また『萬象名義』の右旁下部については、「土」旁と左右の懸針体の二画が誤って「田」形となったものである。これらの誤りを正せば、『萬象名義』と睡虎地の「童」字は同一構造となる。

1.1.10 「楽」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>穎</td>
<td>穎</td>
<td>穎</td>
<td>穎</td>
<td>穎</td>
<td>穎</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、「楽」字に従う小篆は「親」 (2.3 ウ) ・「楽」 (4.2 オ) の二字である。「楽」旁の構造について、睡虎地『為 24』の「親」字はurrectionに作り（『睡虎地』: 139）、『北海相景君銘』の「親」字はrectionに作る（『隸解』: 31）。『萬象名義』の「立」形に関しては、上述の「音」字・「言」字・「童」字及び「辛」字の如く、睡虎地と同一の字体である。

また、『萬象名義』並びに両徐本の「親」字の小篆は、「木」旁の上部に横一画を加える。この字形は『婁壽碑』のrectionに見られる（『隸解』: 31）。現行の『說文』は「楽」字を載せず、這 (楽) 字のみ収める。この字体は『萬象名義』並びに両徐本の「楽」旁と同一であり、かつ『萬象名義』木部の「楽」 (zhěn) 字に等しい。

現行の大徐本によれば、「親」字は「従木楽声」であり、その「楽」字は「従木辛声」であり、また「辛」字は「従一従辛」とある。しかし「辛」について、金文においてすでに「辛」形と「辛」形の両者が見られる。例えば前者に『申鼎』があり、後者に『司母辛鼎』・『父辛盉』などがある。故に「辛」形と「辛」形の相違は後漢以降の隸変によるのではなく、金文から始まる別系統の字体と考えられる。『萬象名義』と両徐本の「親」・「楽」の小篆及び隸定字の「楽」は「辛」形の系統であり、「親」字は「辛」形の系統と考えられる。

1.1.11 「其」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>靑</td>
<td>靑</td>
<td>靑</td>
<td>靑</td>
<td>靑</td>
<td>靑</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、xious (簿 1.24 オ) が見られる。『萬象名義』の
小篆の右旁は伺に従うが、大徐本はそれが変化して「臣」形となっている。大徐本に「其」項はなく、「巽」項に「臣」（臣）、古文箋省。〇（興）、亦古文箋。〇（尓）、亦古文箋。（後略）とある。上部を□に作るものに『泰山刻石』の□、『司徒袁敞碑』の□、『碧落碑』の□、『古今文字讖』倒変箋の□などがあり、また『林罕集』の「其」字は□に、『古孝經』は□に作る（『古文四声韻』: 1.19b）。これらの文字と両徐本を比較すると、前者がよく一致する。

また、『為 18』の「巽」字は□に作り（『睡虎地』: 68）、上部は「甘」形に従い、内側は交又せず、下部は既に「臣」形に変化している。□の上部の「甘」形は『萬象名義』の□と基本的に一致し、故にこの字体は禮文に由来すると考えられる。またその下部は伺に従い、これは大徐本の□（興）と一致し、古文に由来すると考えられる。

一方、『萬象名義』高山寺本には後漢以降に成立したと考えられる「其」形に従う□（緒 1.17 ウ）がある。この「臣」形に従う字は、上述の如く睡虎地の□に既に見られ、李斯の『泰山刻石』や『琅琊台刻石』にも引き継がれている。また『孔宙碑』の「其」字は□で作り（『隷本』: 15）、上部の「甘」形は「甘」に変化する。これも複雑化した俗字である。『萬象名義』の小篆の「其」は、隷字の構造である「臣」形に従うが後世の小篆を思えば、後世の字と見るようにも、今は『睡虎地』の字形は誤読と考えられる。

また大徐本の「其」形は李陽冰『紗雲縣隷神記』の「共」字と同一であり、おそらく李陽冰の『説文』の影響を受けたと考えられる。しかし李氏は『千字文』においては隷文と全同の□（其）を記しており、李氏がこの字体の「其」を用いたということは、先行する隷文系統の唐写本『説文』すなわち『萬象名義』の「其」の小篆がこの構造であったことを示唆している。ここからも『萬象名義』の□（緒）の右旁は、元来は「共」形であったと考えられる。

1.1.12 「型」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>型</td>
<td>型</td>
<td>型</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、「型」字に従う小篆は「型」（1.31 ウ）の一字である。『萬象名義』の当該小篆は「井」旁の中に一点を加えて「井」形とする。小徐本の「型」字も『萬象名義』と同様に□であり、一点が見える。この一点は金文の『克鼎』に既に見られる。李斯の「井」字においては、□（日乙 16）・□（日甲 49）が見える（『睡虎地』: 74）。また『天井道碑』の「井」字は□に作り、「史晨後碑」の「井」字は□に作る（『隷本』: 113）。従って、隷文及び漢隷の段階ですでに「井」形と「井」形の両者が存在することが知られる。また『郭店』（老甲 16）の「型」字は□に作り（『戰國文字編』: 885）、その他の戰国文字に見える「型」字も皆「井」形に従う。『隷隷』の中に「型」字は見出せず、その字体を確認できない。『萬象名義』と小徐本が「井」形で一致し、大徐本が「井」形であることから、「井」形の方が『説文』においてより古い字体を保持していると考え

（89）
なる。

### 1.1.13 「辛」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>坪</td>
<td>無</td>
<td>無</td>
<td>坪</td>
<td>坪</td>
<td>坪</td>
<td>坪</td>
<td>坪</td>
<td>坪</td>
<td>坪</td>
<td>坪</td>
<td>坪</td>
<td>坪</td>
<td>坪</td>
<td>坪</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において「辛」字の構造に関して、『萬象名義』と大徐本には異同が見られる。睡虎地（日乙 110）の「辛」字はに戰に作り（『睡虎地』: 218）、『萬象名義』の字体はこれと一致する。一方、『孔龢碑』の「辛」字は戰に作り（『隷辨』: 30）、既に横一画が増えた俗字と為っている。

### 1.2 古文・『碧落碑』などの楚文字と字体が一致する小篆

#### 1.2.1「皇」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>泰山</th>
<th>詔銘</th>
<th>貫安</th>
<th>李千</th>
<th>文字</th>
<th>夢千</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>皇</td>
<td>皇</td>
<td>皇</td>
<td>皇</td>
<td>皇</td>
<td>皇</td>
<td>皇</td>
<td>皇</td>
<td>皇</td>
<td>王</td>
<td>王</td>
<td>王</td>
<td>王</td>
<td>王</td>
<td>王</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、「皇」字に従う小篆は「皇」（1.21 戯）・「塢」（1.26 戯）・「塢」（1.35 戯）の三字である。「皇」字は上部を「自」形に作るものと、「白」形に従うもの二種が存在する。

『萬象名義』の「皇」字と同じく「白」形に従う「皇」字について、金文の『高壇』の「自」字が「白」形に従う（『金文編』: 244）。故に「皇」形は金文の時に既に存在する。また、馬王堆（易 028）は戰に作り（『馬王堆簡帛文字編』: 10）、秦代の『泰山刻石』・『秦二十箋傔詔銘』及び後漢の『司徒袁安碑』もみな上部を「白」形に作る。また『韓非碑』の「皇」字も戰に作り（『隷辨』: 61）、「白」形に従う。顧錕吉氏は按『説文』作皇従自。『薛尚功鍾鼎彝器款識法帖』・『盡和錦銘』朕皇考受天命。『秦権銘』皇帝盡兼并天下、皇皆従白。秦『蟄山碑』皇帝字、自従白。白與自同、非黑白之白。『韻會』云文省作皇、非也。』と云う（『隷辨』: 61）。上に見るように秦隷の時には既にはすでに「白」形に従う「皇」字と、「自」形に従う「皇」とが併存しているゆえ、顧錕吉氏の説は正しい。また『蟄山刻石』にはないが、同じく李斯書の『泰山刻石』も「白」形に従う。

一方、「自」形に従う「皇」字については、睡虎地（日甲 101）は戰に作り（『睡虎地』: 4）、上部を「自」形に従う。また小徐本と大徐本「皇」の小篆は「戰」であり、「自」形に従う。
また大徐本の「白」項は「此亦自字也」と説解しており、許慎の項にも両者が存在していたと考えられる。また、唐・德宗の時に成書したと考えられる『古今文字譜』芝英箋（四天王寺大学恩賜堂文庫本）に「皇」字があり、「自」形に従っている。

夢英『篆書千字文碑』は乾徳三年（965）の建立であり、大徐本が成書した雍熙三年（986）よりも早い。その『篆書千字文碑』の小篆「皇」は図の如く「白」形に作る。ここから、唐宋の時にも「皇」と「皇」のそれぞれの系統があったと思われる。結局、「自」形に従う「皇」字は両徐本と『古今文字譜』のみであるゆえ、『説文』において「自」形に従う小篆となっただのは、おそらくは小徐本の時であろう。

1.2.2 「哉」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>万象</th>
<th>李千</th>
<th>春千</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>哉</td>
<td>哉</td>
<td>哉</td>
<td>哉</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『万象名義』高山寺本所載の小篆において、「哉」字に従う小篆は哉（2.11 ウ）の一例である。『哉』字の小篆に関して、『万象名義』と大徐本は左方の上部を異にする。楚『帛書乙』の「哉」字は哉に作り、燕『侯春篇』の「哉」字は哉に作る（『戦国文字編』：68）。また『碧落碑』（拓本）は「哉」字を哉に作り、「哉」に従う（ただし『古文四声韻』1.30a に引く「哉」字は哉に作る）。また『隷隷』において、『夏承碑』の「哉」字は哉に作るが、他の「哉」字は「哉」形に従う（『隷隷』：29）。

現在通用されている「哉」字は燕『侯春篇』と構造を同じくし、「哉」形に従う。『万象名義』と大徐本は楚『帛書乙』・『碧落碑』と構造を共にし、「哉」形に従う。但し『万象名義』は「哉」の左方の中央横一画を曲線させる。これは『古文四声韻』に載せる碧落文の「哉」字と同じである。大徐本「哉」項の説解に「従口哉声」あり。また「哉」形の原型を楚『帛書乙』に見出すことから、『万象名義』・大徐本の両字は共に原本『説文』の「哉」字の構造を留めていると考えられる。

1.2.3 「希」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>万象</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>希</td>
<td>希</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『万象名義』高山寺本所載の小篆において、「希」字に従う小篆は「噌」（2.11 ウ）の一例である。「希」項の小篆に関して、『万象名義』と小徐本は相似する。

また『李商隱字略』の「希」字は噌に作る（『古文四声韻』：1.22a）。ここから、『万象名義』の「希」項は上部を草冠に作っているように見えるが、今は小徐本の文字の誤写と考える。
1.2.4 「弁」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>万象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>李千</th>
<th>奮千</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>『弁』</td>
<td>『弁』</td>
<td>『弁』</td>
<td>『弁』</td>
<td>『弁』</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『万象名義』高山寺本所載の小篆において、「弁」字に従う小篆は「弁」(1.30 ウ) の一字である。『箋譜』の「弁」字が440に作り(『古文四声譜』: 4.25a)、『万象名義』「弁」字の「弁」旁と一致する。『万象名義』の当該小篆は古い字体を留めていることが知られる。

1.3 避諱に関係する小篆

1.3.1 「秀」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>万象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>『秀』</td>
<td>『秀』</td>
<td>『秀』</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『万象名義』高山寺本所載の小篆において、「秀」字に従う小篆は「琇」(1.27 ウ) の一字である。『万象名義』の「秀」は、草名を戴かない。これは臘定した楷書の字も同様であり、『万象名義』と宋本『玉篇』は「秀」を異体字とする。一方、両徐本の小篆は「秀」に従い、大徐本の「秀」項には「上諱。光武帝名也。」とある。また、『避諱』の「秀」項は、「徐鉉『系伝』曰漢光武帝諱、故許慎闇而不書也。段玉裁亦曰此書之例。當是不書其字。但書上諱二字。書其字、則非諱也。今本有篆文者、後人補之。代字、以茂代秀。」と云う(『避諱』: 496)。つまり許慎は原本『說文』において、後漢の光武帝劉秀（前 6-57）の「秀」を避諱して「上諱」としたと考えられ、現行の大徐本に「秀」の小篆の名が載せられているのは、許氏より後世に補ったものである。また両徐本の「秀」(yōu) 項には「禾栞下生莠。従仲秀声。釀若酒。」とあり、「秀」字が用いられていた避諱されていない。これも許慎より後世に改められたものと考えられる。

また両徐本の「琇」項には「石之次玉者。從玉莠声。『詩』曰充耳琇篋。」とある。「琇」は今音 xiù であり、「莠」は上述の如く今音 yōu であって一致しない。正しくは「秀声」となるべきである。この「莠」・「琇」は許氏が光武帝の「秀」を避諱した名残と思われる。後世に改められなかった例と思われる。

「秀」を避諱して「莠」とすることは、隋末の李淵の時に「唐」字を避けるために、「唐」を用いた例と類似する(『避諱』: 440)。すなわちこれは諱の字に偏旁を加えることによって避ける方法である。『段注』の「琇」項に「『衛風・鄭耳琇篋伝』琇・莠・美石也。按琇・莠是二石名。」と云って、「琇」を用いないに「琇」字を用いている(『段注』: 16)。ここから、両徐本及び『段注』の「充耳琇篋」の「琇」は、「琇」を避けるために改めたものであることが知られる。段氏はまた「按『語文』従莠、隷従秀。猶莠之多為石也。」と云って避諱に言及しないが(『段注』: 16)、ここは光武帝の避諱と見るべきであろう。両徐本は説解の「莠声」に随って、小篆に草名を付けて異とするが、『万象名義』に草名に従わない琇が存在す
るゆえ、これが避詰の影響を除いた小篆と考えるのが妥当である。

1.3.2 「観」字

観 観 観
観 観 観

『万象名義』高山寺本所載の小篆において、観（2.3 オ）が『観』の小篆である。『万象名義』の当該小篆は左旁を「民」に従う。この隷定字（親字）も観として、同様に「民」に従う。「観」字に関して、大徐本は「従見氏声。読若迷。」と云い、段玉裁氏は「按各本篆作観。解作氏声。氏声則応読若低、與詰若迷不協。故『広韻』十二歴日観、病人視見。『集韻』日観観二同。『集韻』・『類篇』観又民堅切、訓病視。蓋古本作観、民声。読若民者、其音変。読若迷者、双声合音也。唐人諺民。偏旁省一畫。多似氏字。始作観、故又詰作観。乃至正詰並存矣。今改從正体。」と云う（『段注』: 409）。

また、『遊宦記聞』巻九に「唐太宗譲世民。民則易而從氏。」とある（『避詰』: 324）。『万象名義』の小篆の辯は正に段氏の説の正当性を示す証拠となる。後漢の原本『説文』の頃に唐代の李世民の「民」を避詰することは有り得ないと謂えられることは有り得ないと謂えられる。しかし『万象名義』は唐写本『説文』を用いて編纂されているはずであり、なぜ「民」が使われているのか定かでない。あるいは大師は帰国後の日本にて『万象名義』を編纂した故、避詰を改めたものか。いずれにせよ、両徐本は修正が求められる。

1.4 後起の小篆

1.4.1 「易」字

易 易 易
易 易 易

『万象名義』高山寺本所載の小篆において、「易」字に従う小篆は「場」（1.34 オ）の一字である。『万象名義』の小篆は右旁を「易」に従う。この隷定字（親字）も同じく場に作る。

一方、両徐本の右旁は「易」に従う。

睡虎地（日甲 31 背）の「場」字は場に作り、右旁は「易」に従う（『睡虎地』: 172）。
また『桐柏廟碑』の場（場）並びに『華山廟碑』の場（場）も左右を「易」とする（『隷辨』: 58）。「易」は『受八關齋戒文』の「場」字のように、「易」が隷定された後に唐代に混同されて生成された俗字であり（大柴 2009: 38・64）、『段注』の「場」項も「俗作場。」という。よって、『萬象名義』の当該小篆は、唐代に作られたものと考えられる。

1.4.2 「西」字

西 西 西 西 西 西 西 西 西

（93）
『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、「西」字に従う小篆は「禫」（1.20 才）・「壠」（2.13 才）の二字である。大徐本において、「壠（罩）」項は「壠（罩）、従茲鹹省声。壠（罩）、篆文罩省。」とあり、「鹹」項は「従鹹咸成声。」とあり、「鹹」（喻）項は「壠（鹹）、従七省、像塩形。」とあり、「西」項は「壠（西）、鳥在巢上也。象形。日在西而鳥西。壠（鹹）、古文西。壠（鹹）、籀文西。」とある。「西」項に関しても、『萬象名義』の二つの小篆は壠（西）に従い、大徐本は壠（鹹）に従う。

この「西」字に関して、段玉裁は「壠、下像巢、上像鳥。会意。上下皆非字也。故不曰会意而曰象形。鳥在巢者此篆之本義。」と云う（『段注』：585）。しかし、甲骨文の「西」字は壠（鉄 133.2）に作り、徐中舒氏は「象亀鳥形」と解釈する（『甲骨文字典』：1276）。羅振玉氏は「巣字篆文作壠、従亀乃壠伝写之訛、亦正是巣形也。日既西落、鳥已入巣、故不復如篆文於巣上更作鳥形矣。」と云う（『甲骨文字典』：1276）。また王国維氏は『釋西』において「卜辞屡見壠、両字、余謂此西女也。『說文』西字注云在西方鳥栖、象鳥在巢上。壠、壠二形正象亀巢。王又著『錘鼎款識』有巣單古、其文字革、象鳥在巣下、而以畢掩取之。又『巣單父丙爵』有巣字、則省巣巢。手執干鼎之巣字、則省巣巢。巣巣字實象亀巢、即巣之古文。似当従巣在木上、而壠則象鳥形、篆体失之。若『說文』訓巣之巣字、則古作壠、與壠字有別矣。」と云う（『観堂集林』上：174）。

按まずに、「巣」字の上部の「亀」形も壠の一部分であり、「亀」と「田」は壠が分離したものであり、元から鳥に相当する部分はないと筆者は考える。戦国・秦『秦公簋』の「西」字は壠に作る（『戦国文字編』：777）。壠の上部の「十」形は壠の上部の一部分が変化して成ったことが知られる。

また大徐本の「鹹」（喻）項に「従西省、像塩形。」とあり、段氏は「省字衍。此承上文局部従巣之巣文也。謂鹹也。」と云う（『段注』：586）。しかし、甲骨文の「鹹」字は壠（存 1.68）作り、徐中舒氏は「象盛塩頃器之形。壠為容器、其中之壠為塩粒。」（中略）金文壠字作壠（『免盤』）、與甲骨文同。同（中略）按『說文』謂鹹従西省、不確。』と云う（『甲骨文字典』：1278-1279）。

按まずに、睡虎地の「西」字には壠（日乙 163）、壠（日乙 75）が見られ、また「塩」字に壠（秦 182）が見られる（『睡虎地』：177）。また『華山廟碑』の「西」字は壠に、『史晨奏銘』の「西」字は壠に作り（『隷辨』：26）、『劉寃碑陰』の「塩」字は壠に作る（『隷辨』：79）。「西」字をどのように変化させても「鹹」字とは成り得ない。故に徐中舒氏の説は首肯されるべきであり、『萬象名義』の小篆の壠とは「西」に従っていないと考えられる。

また大徐本の「巣（罩）」項は「巣（罩）、従七鹹省声。巣（罩）、篆文罩省。」とある。この項の「罩」はも適当ではない。『張綸功徳銘』に壠（壠）、『周愷碑陰』に壠（壠）があり、顧藚吉氏は『按『說文』作壠、従巣従巣。巣上従鹹、変巣従巣。』と従う。壠復変従曲。諸碑西曲字或 (94)
誤用、如農上安西。蓋以曲為西。此則以西為曲也。」と云う（『隷辨』: 78）。上述の如く睡虎地の（日乙 163）と『華山屍碑』のは、依然として鳥の巣の形を保持しており、且つ「曲」形に似る。故に『萬象名義』のと議は隷変字が「西」並に従うようになった後に、逆にと成った後起の小篆と考えられる。

1.4.3 「衣」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>木部</th>
<th>文字</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>祥</td>
<td>祥</td>
<td>祥</td>
<td>环</td>
<td>环</td>
<td>环</td>
<td>枚</td>
<td>枚</td>
<td>壇</td>
<td>壇</td>
<td>壇</td>
</tr>
<tr>
<td>壇</td>
<td>壇</td>
<td>壇</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
</tr>
<tr>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
<td>寓</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、「衣」字に従う小篆は「祥」（1.19 オ）・「環」（1.22 ウ）・「壞」（1.29 ウ）・「壞」（1.32 オ）・「哀」（2.15 オ）の五字である。

『萬象名義』と両徐本は、「衣」の部分において異同が見られる。唐写本『説文』口部の「衣」字はに作（周祖謨 1957 : 18）。衣の部分の字体は『萬象名義』と完全に一致する。しかし唐写本『説文』木部の「環」字はに作（周祖謨 1957 : 45）、「衣」を含む「繩」の部分の字体は両徐本・李陽冰『千字文』・『古今文字讚』摹印箋と一致する。故に唐写本『説文』の小篆の間に口部と木部の両系統が存在することが知られる。

睡虎地（日甲 29 背）の「衣」字はに作（『睡虎地』: 15）。『北海相景君銘』の「衣」字はに作（『隷辨』: 29）。これらの「衣」字における「衣」の部分の字体は、唐写本『説文』木部や両徐本などと一致する。また孫星衍『魏三体石經遺字考』（百部叢書集成）に（衣）があり、この「衣」字は睡虎地系統の字体から『萬象名義』の字体へ移行する過渡期の字体に位置すると思われる。故に『萬象名義』と口部の字体の方が対漢以降に形成された後起の小篆と思われる。

また、李陽冰『千字文』の「衣」字は唐写本『説文』木部の「環」字と同じことから、木部と李陽冰改変の『説文』の小篆の間に関連性が推測される。

1.4.4 「容」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>瑩</td>
<td>瑹</td>
<td>瑹</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、「容」字に従う小篆は「瑩」（1.22 ウ）の一字である。右旁について、両徐本は横一画を有するが、『萬象名義』には見られない。

戦国時代・三晉『中山王鼎』の「叡」字はに作、横一画がある（『戦国文字編』: 253）。一方、『孔隷碑』の「叡」字はに作、横一画がない（『隷辨』: 134）。前者の「容」旁
の構造は大徐本に同じであり、後者は『萬象名義』と一致する。おそらく『萬象名義』の字体は小篆を簡略化した隷変字を基とする後起の小篆と考えられる。

1.4.5 「香」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>香</th>
<th>香</th>
<th>香</th>
<th>香</th>
<th>香</th>
<th>香</th>
<th>香</th>
<th>香</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において「香」字に従う小篆は、「香」（5.2 ウ）・「馨」（5.2 ウ）・「穫」（5.2 ウ）の三字である。「香」の字については、『萬象名義』と両徐本の小篆の構造は異なっている。『華山廟碑』の「香」字は木に作り、顧藇吉氏は「按『説文』作香、従黍徒目（甘）。他碑黍成作柔従両禾。故香亦作穫。」と云う（『隷辨』：57）。また、『衡方碑』の「香」字は香に作り、顧氏は「按『類篇』云香隷省作香。」と云う（『隷辨』：57）。

顧氏の説に依れば、『萬象名義』の小篆の「香」は後漢以降に簡略化した字体となる。

1.4.6 「亜」字（えんよう）

<table>
<thead>
<tr>
<th>亜</th>
<th>亜</th>
<th>亜</th>
<th>亜</th>
<th>亜</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、「亜」字に関してする小篆は「亜」（1.35 ウ）・「亜」（2.6 ウ）の二字である。『萬象名義』の小篆の「亜」字は「亜」形に従う。一方、睡虎地（法160）の「亜」字は亜に作り、「亜」字に従う（『睡虎地』：25）。「亜」字は隷変の時に「亜」形に変化した（大柴2009：84「氏＝亜」頃参照）。顧藇吉氏は『曹全碑』において「按『説文』延従亜。亜興引同。碑従変走。」と云う（『隷辨』：45）。顧氏に依れば、『萬象名義』「亜」字の「亜」字従後漢以降に「亜」から変化したものであり、当該小篆は後起字と考えられる。また、『萬象名義』の「亜」字の小篆における「亜」字はおそらく誤写であろう。

1.4.7 「复」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>复</th>
<th>复</th>
<th>复</th>
<th>复</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
<td>小篆</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、「復」字に従う小篆は「馥」（5.2 ウ）の一字である。「復」字の小篆に関して、『萬象名義』と大徐本に異同が見られる。睡虎地（日甲166）の「復」字は亜とし（『睡虎地』：23）、『楊統碑』の「復」字は馥に作り、「馥」字は馥に作り（『隷辨』：161）。秦隷・漢隷に『萬象名義』と同一の字体の「復」字は見られず、『萬象名義』「馥」字の「復」字の構造は後漢以降に隷定字が簡略化
された俗字に由来すると考えられる。

1.4.8 「茲」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>泰山</th>
<th>嵩山</th>
<th>三体</th>
<th>李千</th>
<th>文字</th>
<th>文字</th>
<th>梵千</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>嗴</td>
<td>嗴</td>
<td>嗴</td>
<td>茬</td>
<td>茬</td>
<td>茬</td>
<td>茬</td>
<td>茬</td>
<td>茬</td>
<td>茬</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、「茲」字に従う小篆は「喴」（2.14 ウ）の一字である。「茲」旁の上部において、『萬象名義』とその他の李斯『泰山刻石』・『嵩山開母廟石闕銘』・『三体石經』・李陽冰『千字文』・大徐本などに字体の異同が見られる。睡虎地（日甲 34）の「茲」字は「喴」に作り（『睡虎地』：170）、『桐柏廟碑』の「茲」字は「喴」に作る（『隷辨』：16）。この両字の字体は、両李氏及び大徐本などと一致する。また『古今文字讚』灌藤書の「茲」は『三体石經』と完全に一致し、層露篆の「茲」は『三体石經』と構造を同じくするが、草冠を層露体に垂れ流す。

一方、『嵩山開母廟石闕銘』の「茲」字は「喴」に作り（『書道全集 2 中国 2 漢』）、中間に横一画が見られる。この字体は『萬象名義』の「茲」旁と相似し、『萬象名義』の「茲」旁の字体は、おそらくこの「喴」の誤謬と思われる。『嵩山開母廟石闕銘』は後漢・安帝の延光四年（123）に成立し、原本『說文』の成書時期から僅かに22年遅れる。しかし、睡虎地・李斯『泰山刻石』の秦文字系統は横一画が見られず、小徐本も『萬象名義』と異なる故、今は横一画を有する方を後起の小篆と見做しておきたい。

1.5 段玉裁の推測の証拠となる小篆

1.5.1 「反」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>反</td>
<td>反</td>
<td>反</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、「反」（今音 nián）の小篆は「喴」（3.70 ウ）である。この異定である隷字は「喴」であり、小篆・隷定は共に「反」形に従う。一方、両徐本は小篆を「喴」に作り、この隷定である「反」は「反」形に従う。この相違に関連して、『段注』は「大徐作反而日或従又。小徐作反而日或従又。疑従又為是。」と云う（『段注』：400）。現行の両徐本の小篆は共に「喴」であり、隷解に「或従又」として『段注』の記述と異なるが、「反」を是とする隷氏の見解は、『萬象名義』の小篆と隷定の隷字によってその正しさが証明される。

1.5.2 彝（佇/仮・1.56 オ）

高山寺本のこの「喴」は右旁の末筆に一撇がある。これは「佇」が訛変したものと思われる。宋本『玉篇』の「仮」項に「佇同上」とあり、『萬象名義』の隷字と考えられる「佇」を異
体字とし、代りに「仏」を親字とする。また現行の大徐本・「仏」項も「彫、従人経生秀。」とあり、右傍「玄」とする。しかし『段注』これは校訂して「従人経生秀」として、彫の右傍である「」を発注して「杮」とする。玄の小篆は差である。故に仏は「仏、仏」に譲定されるべきである。また『共訳』にも「仏、仏、仏」作仏。」とある。ここから大徐本も元は「仏」であったと考えられ、『万象名炎』すなわち唐写本『玉篇』は元来の字体を保持していると考えられる。『万象名炎』の当該字は段氏の説の正しさを示しており、現行の大徐本に改変が求められる。

1.6 両徐本において懸針篆の影響が見られる小篆

1.6.1 「辛」字

『万象名炎』の「」（辛）に関して、大徐本の「辛」項は「辛、従一」と云う。しかし両徐本の「辛」字の小篆は「」に作り、「従一」の部分を除く。この字体は『万象名炎』の「」と一致し、縦の一画は懸針篆の字形を留めている。

また『万象名炎』の「」（辛）と共に、大徐本の「」（辛）と「」（辛）の右傍は共に「辛」であるが、歴代について前者は懸針篆の影響を受けていることがわかる。小徐本の両字は「」（辛）と「」（辛）であり、共に懸針篆の様式である。

1.6.2 「西」字

『万象名炎』の「」（西）・「」（西）は、「婚姻」の上部の一画を引き延ばしており、懸針篆の特徴を表しているが、大徐本の「」（西）と「」（西）は「婚姻」の一画を引き延ばしていない。しかし、小徐本の「」（西）並びに現行の大徐本の「」（西）は、懸針体と考えられる。『万象名炎』はまた「」（西 1.30 オ）と「」（西 2.5 オ）が見られ、両小篆の「」部分が「西」・「西」と同じく懸針体を呈している。ここから、現行の「西」字の小篆である「」は、古文の「西」字である「」の「」部分の横一画を上述の如く引き延ばし、且つ縦一画を「」（上）に見られる如くに上方に伸ばした「」の誤読と考えられる。両徐本の「」の縦一画がその下部の「図」形と繋がっていないのは誤りと考えられる。

1.6.3 「童」字

「童」字に関して、大徐本の「」、小徐本の「」、李陽冰『千字文』の「」は、「里」形の下部の左右二画を垂らしている。睡虎地（雉 32）の「」（童）と比して、両徐本と李氏の筆勢は懸針篆の影響が現れる。

1.6.4 「堇」字

「堇」字に関して、『万象名炎』の「」（1.38 オ）と大徐本の「」は小徐本の「」に比して上項の「童」字の如く、懸針体の特徴を有している。「堇」字に関しても同じく（『万象名炎』）と「」（大徐本）は懸針体であるが、小徐本の「」には見られない。すなわち、これは大徐本が
唐写本『説文』の影響を受けている例である。

1.6.5 「希」字
「稀」字に関して、『』（『萬象名義』）・『』（小徐本）・『』（大徐本）を比較するに、『萬象名義』と小徐本は、右旁中央の左二画を引き伸ばしており、懸針篆の字形を有していることが知られる。

2 『萬象名義』と大徐本の掲載字に関する異同
2.1 「鈺」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>万象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>鈺</td>
<td>鈺</td>
<td>鈺</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、『』（鈺 1.23 ウ）が見られる。現行の『説文』は「鈺」を金部に置き、「印鼻也。『鈺』（鈺）、古文鈺従玉。」と云う。また『段注』の「鈺」項は「古文鈺従玉（鈺）。董之籀文従玉。古文印鈺字従玉。蓋初作印時、惟以玉為之也。」と云う。しかし、『萬象名義』の『』は玉部の「鈺」項に置く。また、『汗簡』に載せる『説文』の「鈺」字は『』に作り（『汗簡』：4）、「玉」旁の字形は現行の大徐本と異なる。この字形は大徐本の「玉」項に「『董、古文玉」とある如く古文である。

『萬象名義』は「鈺」項の前後にも小篆を記している故、唐写本『説文』の「鈺」項においては、古文の『』（鈺）と小篆の『』（鈺）の両字が記されていたと思われる。

2.2 「禋」字
『萬象名義』高山寺本は示部において「禋」字の小篆である『』（1.20 韜）を収める。しかし両徐本にこの小篆は見られない。大徐本は示部の新附において「禋」字を補い、徐鉉氏は「一本雲古文禋也。」と云う。『萬象名義』は「禋」の小篆以外に、「禋」の小篆の『』（1.18 韜）も見られる。ここから『萬象名義』が依拠した唐写本『説文』においては、「禋」と「禋」は別字として扱っていることが知られる。『萬象名義』によれば、両字の字義は前者が「父廝（廟）也」とあり、後者が「煞（殺）也」とある。

また『奬朝碑』において、「禋」字の『』載せる、顧薄膜氏は『説文』無禋字。徐鉉新附字有之。注云禋古文禋也」と云う（『隷辨』：96 上）。大徐本と『隷辨』の間に「王（玉）」に従う「禋」と「土」に従う「禋」の相違が見られる。これに関して、段玉裁氏は「禋」項において「董之籀文従玉。 （中略）蓋初作印時、惟以玉為之也。」と云う（『段注』：706）。籀文の「禋」は、漢隷の段階で「王」形の一画が省かれて俗字の「禋」となったと考えられる。
籀文の「禋」が後漢の時代より前に存在し、かつ『萬象名義』に実際に「王（玉）」に従う小篆の『』を確認できるということは、原本『説文』にこの字が収められていたと考えられる。

（99）
2.3 善（善/善・3.22 ウ）
大徐本・「譜」項：吉也。從譜從羊。此與義美同意。善、篆文善從言。
『萬象名義』・善（善）項：是闘反。告（「吉」の誤写）。工。佳。太（「大」の誤写）。
『萬象名義』・善（譜）項：是闘反。告（「吉」の誤写）。巧。大。佳。
唐写本『玉篇』・「善」項：『說文』篆文善篆字也。善、吉也。工佳也。大也。在譜部。
或為善字。在口部（『原本玉篇』：46）。
上の四項から、大徐本の「善（善）」字は、「譜」項の中に含まれていることが知られる。
一方、『萬象名義』の「善」と「譜」は、それぞれが一項を為している。また宋本『玉篇』
の「善」字は「譜」項に続いて現れ、「善同上。今作善。」と云う。ここから、『萬象名義』
すなわち唐写本『玉篇』は「善」項を一項として独立させたと考えられる。善は「善」の隷定字である。

3 『萬象名義』に見られる小篆の隷定字について
3.1 偏旁の字体が隷定字の原型を留めるもの
3.1.1 嘉（嘉/嘉・1.35 オ）
『萬象名義』の嘉に関して、宋本『玉篇』は「艸」に作る。大徐本「艸」字の小篆は艸で
あり、左旁は「舟」に従う。また嘉（嘉・3.12 オ）並びに校（校・4.24 ウ）も同様に「舟」
に従う。前者に関して、宋本『玉篇』は「艸」に作る。大徐本「艸」字の左旁も同じく「舟」
に作る。後者に関して、大徐本の「服」字の小篆は艸に作り、左旁は「舟」に従う。
魏『馬都愛造像』の「舟」字は嘉に作り（『碑別字』：29）、『萬象名義』とその字形を等
しくする。よって『萬象名義』の嘉・校・校は共に小篆の元来の字体である「舟」を隷定
し、加えて「舟」旁の第一画を減じて俗字としたことが知られる。また「舟」の「足」旁は「反」
の俗字である。

3.1.2 俶（俶/道・1.36 ウ）
大徐本「道」項に「虜、所行道也。従走従首。」とあり、『正字通』の「道」項は「『說文』
本作遷。」と云う。『萬象名義』の遷は小篆の隷定のままの字体を保持していることが知られ
る。

3.1.3 備（備/備・1.58 ウ）
宋本『玉篇』は「備」項に続いて「備」項があり、「『說文』備」とする。この「備」は
小篆の備の隷定字である。つまり、『萬象名義』右旁の上部は「備」の誤写である。また唐・
褚遂良『良冊』の「遷」字は備に作り、「備」の下部は『萬象名義』の嘉と似る。故に
備は、元来是隷定字の「備」であり、後に右旁の上部を誤写し、唐代に下部が俗字化したも
のと考えられる。

3.1.4 頂（額/額・1.81 ウ）
大徐本の「頂（額）」項に「臓（額）、額頁、从頁各声。臣餔等今俗作額、」とある。小篆の臓は、左旁を「各」に従う。『萬象名義』の頂（額）は正に小篆の隷定字である。

3.1.5 捧（挙・2.30 オ）
大徐本の「挙」（今音 bái）項に「毬（挙）、手至地也。従手挙。挙、音忽。挙（挙）、揚雄説挙従両手下。」とある。現在の通用字の「挙」は、毬の隷定字である「挙」の手傍を簡略化した俗字が正字となったことが知られる。一方、『萬象名義』の毬は挙を隷定した字である。その左旁は「払」に従い、「払」となる前の字形を保持している。右旁の「幸」は下部を誤写する。

3.1.6 還（反・2.51 ウ）
『萬象名義』の反について、大徐本の小篆は還に作り、隷定字を「反」（今音 fǎn）とする。宋本『玉篇』は「反」に作るが、この字も還の隷定字と言える。『萬象名義』の尸部には、「反」（今音 niǎn）字があるゆえ、還は隷定字の「反」誤謬と考えられる。

3.1.7 距（騫・2.60 オ） 騁（毬/毬・5.63 ウ）
大徐本の「騫」の小篆は毬に作り、この隷定字は「毬」である。『萬象名義』の二字は、隷定の字体を保持している。

3.1.8 遭（同/冒・5.11 オ）
『萬象名義』の遭について、大徐本の「冒」字の小篆は遭に作る。『萬象名義』の「同」字は通用字の「冒」に比して、元来の字の構造を留めた隷定字であることが知られる。

3.1.9 湿（溼/溼・5.96 オ）
『萬象名義』の湿について、大徐本の小篆は湿に作り、隷定すれば「溼」となる。『集韻』に「溼、或作濕。」とあり、「溼」の字の通用字が「溼」である。『萬象名義』の當該字は小篆の溼の構造を留めている。ただし「土」旁は一点が加わった俗字であり、「絲」旁は画数を省いて「反」となった俗字である。

3.1.10 「亀」字
現行の大徐本「亀」（cháo）項は「亀（亀）、従亀従且。徐鉉等曰今俗作熾。亀（亀）、篆文（古文）従亀。」と云う。『段注』は「亀（亀）、古文从亀。古文。各本作篆文、今依『玉篇』而正。凡先古籀後篆者、皆由文勢不得不介。此非其比也。』広韻』古本亦必先亀後亀、
注日古文。今本二大字转写誌挌。『集説』、『類篇』依調大徐而誤。毎見日部、読若竪。古文
従毎毎声。」と云う（『段注』: 680）。
『楊君石門頌』の「鱗」字は鱗に作り、顧諼吉氏は「按『説文』作鱗、從鱗従旦。碑今省。」
と云う（『隷辨』：49）。しかし、睡虎地（為20）の「鱗」字は鱗に作り（『睡虎地』：199）、
『古尚書』も鱗（鱗）に作って（『古文四声韻』：2.7a）、共に上部は「日」に従う。このこと
は大徐本に異体字とする「毎」字にも当て嵌まる。また、『萬象名義』の鱗（鱗 6.104 オ）
と全く同じ隷変字が『楷韻』に見られる（『古文四声韻』：2.7a）。故に原本『説文』も同様
に上部を「日」に作ったと考えられる。そして隷変の時に『楊君石門頌』の鱗のように「亙」
の上部が「一」形に変化し、それが「日」と結びついて「旦」形となったと考えられる。現
行の「鱗」字は鱗の下部を再び「亙」字に戻したものと思われる。

3.1.11 『騵』（嘗・3.17 ウ）
『萬象名義』・騵（嘗）「莫故反。相責望。」
両写本『玉篇』・騵「『説文』相責説也。今為望字。」
大徐本・騵「騵、責望也。 従言望声。」
宋本『玉篇』・騵「相望也。」
『類篇』・騵（嘗）「同説。省文。」

上に列した親字と意義は共に問題が見られる。宋本『玉篇』は親字を「騵」とする。これ
は小篆の騵の隷定である。しかし、「月」旁は不要と思われる。『段注』は「『太玄』騵隵
其戸。范日隵、責也。按、隵之古文作隵、故隵之古文亦作隵。」と云う（『段注』: 100）。
案ずるに、金文において「言」旁を有する「騵」字は皆「月」旁を有していない。例えば、
『伯作隵子篇』は騵に作り、『召卣』の「隵」は「召弗隵隴。王休義如忘。」とあり、『師望鼎』
の騵は「王用隵隴。」とある（『金文編』：147）。
また、「望」字は人が月を見ている様を表し、曖と関係がある字であり、よって「指責」
は元来の意味ではない。上述のように王休氏は「隵」を「義如忘」（義は「忘」の如し）と
云う。「師望鼎」の「王用隵隴聖人之後。」の一文において、白川靜氏は「隵」を「忘」と
見做しており（『西周青銅器銘説文』: 62）、この解釈は王氏と一致する。しかし、『類篇』
の「隵」（「隵」の誤り）は「欺也。」と云い、『広韻』の「隵」（「隵」の誤り）は「褒
也。」と云う。この字義は大徐本と一致する。ここから、「隵」字は「言」旁を有するが故
に、その字義は話すことと関係があると考えられ、故に「召弗隵隴」と「王用隵隴」の二句
における「隵」は、「欺」あるいは「責」の意となると考えられる。以下、いくつかの例文
を掲げる。

『韓非子』「外儲説左上」：夫挾相為則責望。『翼騩』：『後漢書』杜林伝注望、恨
也。
『史記』「魏其武安侯伝賛」：武安貴族で好権、杯酒貴望、陷彼両賢人。
『史記』「韓安国伝」：今太后、以小節苛禮、貴望梁王。

上に引いた文における「貴望」は皆、「貴難」や「欺験」の意味である。この「貴望」は、本来は「貴誣（詐）」であるべきであろう。『中華大字典』の「詐」項に「属望於人日詐、如詐難於君、貴善於友。」と云うが、おそらくこれは「詐（詐）」字が「望」に改変された後に、「望」（のぞむ）の意味に引きずられて生じた解釈であり、妥当ではない。

大徐本・宋本『玉篇』・『顗篇』に見られる鬱とその隷定字の「鬱」は、おそらく最後に現れた字であろう。これは「望」の古文が「望」に作る故に、「鬱」字の右旁を「望」に誤って、「月」旁を加えたものと思われる。しかし上記の金文には、二つの構造の字しか見られない。すなわち一つは「望」旁に「月」旁を加えて「鬱」字とし、もう一つは「望」旁に「言」旁を加えて「鬱」字とする。この両字は構造・字義共に異なるゆえ、別字と見做すべきである。唐写本『玉篇』に引く『説文』の「相鬱説也。」によれば、現行の大徐本の「貴望也。」は、「鬱」字が「望」字に変えられ、「相」字が省かれたと考えられる。

結果、原本『説文』の「鬱（詐）」項は、「鬱、相鬱説（詐）也。従言望字。」であったと考えられる。後に「鬱（詐）」の使用が減り、唐写本『玉篇』に記される如く「望」によって代用されるようになった。『萬象名義』はその例である。そして「望」は更に誤って「鬱」に変化したと考えられる。

3.2 偏旁の位置が隷定字の原型を留めるもの

3.2.1 菠（哲・2.11 オ）
大徐本の「哲」字は小篆を贅に作り、「手」旁を手偏とする。すなわち、現行の通用字である「哲」は、「手」を上部の左に移動した俗字が正字となったことが知られる。一方、『萬象名義』の菠は、「手」旁を手偏とする小篆のままの隷定であり、元来の構造を留めている。

3.2.2 菱（髪・2.26 ウ）
大徐本の「髪」字は小篆を贅に作り、これを隷定した「髪」は「長（長）」旁を左旁とする。すなわち現行の通用字である「髪」は、「長」旁を上部の左に移動した俗字が正字となったことが知られる。『萬象名義』の菱は、正に隷定字の「髪」であり、原型を留めている。

3.2.3 素（繁・3.30 オ）
『萬象名義』の素について、宋本『玉篇』は「素」に作る。大徐本の「素」の小篆は贅であり、「先」旁を下部の左に置く。この字の構造は『萬象名義』の素に等しい。すなわち、『萬象名義』の当該字は小篆の隷定字であり、元来の偏旁の位置を残している。

(103)
4 問題点の見られる小案及び隷定字
4.1 「堂」(堂・2.58才)
『萬象名義』の「堂」について、宋本『玉篇』に「堂」字を取れない。しかし止部に「堂」項があり、「直庚切。鉅也」とする。また大徐本・止部の「堂」項は「鉅也。徒止尚声。丑庚切。」とする。案ずるに、「止」は「趾」にも隷定される故、「堂」は「堂」と「堂」とも隷定され得る。正に『段注』が「堂」とする。しかしながら、『萬象名義』は「堂」と「堂」の両字を取る。すなわち以下の如くである。

足部・広(堂・2.58才)  充堂反(chang)。蹂。蹂。
止部・広(堂・3.85才) 除(「徒」に誤る)郎(誤写と思われる)反(cheng)。距。又根。
『萬象名義』高山寺本の「堂」項は誤写を有するが、「腎」項と「詩」項の間にあり、この語順は大徐本と一致する故、「堂」項に誤りはない。従って、『萬象名義』すなわち唐写本『玉篇』は「堂」と「堂」の二項を別箇に収めていることが知られる。この二項に関して、日中の漢字字書である『大漢和辞典』と『漢語大字典』は以下の如く記す。

<『大漢和辞典』・「堂」項>
1『集韻』除庚切(cheng)。2『集韻』齒冊切(chang)。3『集韻』式冊切(shang)。
1・2 (1) 『説文』、堂、鉅也。『集韻』切、距也。或作堂(「堂」の誤り)。(cheng)
(2) 『廣雅・釋詁二』堂、蹋也。(chǎng)
3 (1) 『集韻』堂、正也。(shàng)

<『漢語大字典』・「堂」項>
1 cheng 『広韻』直庚切。又昌冊切(chang)。陽部。
(1) 『説文・止部』堂、鉅也。(cheng)
(2) 『廣雅・釋詁二』堂、蹋也。(chǎng)
(3) 『廣韻・養韻』堂、蹋也。(chǎng)
2 shang 『集韻』式冊切。去揚韻。
(1) 『集韻・漾韻』堂、正也。  ※カッコ内・ピンインは筆者が補う。

上引の二冊の字書における第一の音発(cheng)は、宋本『玉篇』の「堂」(直庚切)・大徐本の「堂」(丑庚切)と一致する。『萬象名義』の「堂」項の「又根」とは、『集韻』に「除庚切。音根。」とあることによって、音を表していることが知られる。「庚」・「根」の韻母は共に庚開二に属し、一致する。しかし、『萬象名義』「堂」項の「除郎反」における「郎」は唐開一に属しており、「庚」・「根」と符合しない。『萬象名義』「堂」項の釋義に「又根」とある以上、「堂」項は cheng 音の字義であり、この「郎」は誤写と見做される。
一方、『漢語大字典』の「又昌冊切(chang)」は、『大漢和辞典』の「堂」の「齒冊切」と『萬象名義』の「堂」の「充堂反」と共に昌母・養開三に属して一致する(郭萍: 67・105)。
また周祖謀氏は『広韻』校勘記にて「堂、『玉篇・足部』作蹋。」と云い、宋本『玉篇』の「蹋」

(104)
項は「尺両切。蹴也。」とする。反切上字の「尺」も昌母に属し、よってこの反切と釋義は共に上引の『萬象名義』の「堂」項と一致する。ここから、『漢語大字典』・「堂」項における「『廣韻・養韻』堂、蹴也。」とは、「又昌両切（chāng）」の字義であることが知られる。『萬象名義』の参照として、『大漢和辞典』と『漢語大字典』の「堂」項は、以下の如く改めるべきである。

＜『大漢和辞典』＞
「堂」項
1 chāng『集韻』齒両切。
（1）『廣雅・釋詁二』堂、蹋也。
（2）同説。『廣韻・養韻』堂、蹴也。
2 shàng『集韻』式両切。
（1）『集韻』堂、正也。
「堂」項
1 chēng『集韻』除庚切。
（1）『説文』堂、埀也。『集韻』埀、距也。或作堂。

＜『漢語大字典』＞
「堂」項
1 chāng 昌両切。
（1）『廣雅・釋詁二』堂、蹋也。
（2）通「蹋」。『廣韻・養韻』堂、蹴也。
2 shàng『集韻』式両切。去漾書。
（1）『集韻・漾韻』堂、正也。
「堂」項（『漢語大字典』：1443）
1 chēng『広韻』直庚切。
（1）『説文・止部』堂、埀也。

また、続く第二項『廣雅・釋詁二』の「堂、蹋也。」は「堂」（chǎng）の字義ゆえ、「堂」項においては省くべきである。結局、『萬象名義』に止部の「堂」と足部の「堂」が別して収められていることは確かであり、おそらくは原本『説文』の時には「堂」のみが存在し、その後に「堂」字が生じて『字林』や原本『玉篇』に収められるようになり、両字は混同して用いられた結果「堂」字が主流となり、宋代には「堂」字の後継者として新たに「蹋」字が作られたのではないだろうか。

4.2 憊（憆・2.83才）
『萬象名義』の憆（憆）について、大徐本の小篆は憆に作る。また、大徐本の「怐」字の
異なる文字に変化があり、この変形の変形字として「 Çünkü」が見られる。すなわち同様の二つの小篆である「 yaşad」と「見て」の変形字並びに隷変字が共に「 onPressed」となっている。

しかし、『万象名義』の「仏」項（2.87 オ）に異体字は載らない。一方、宋本『玉篇』は異体字を「見て」と隷変し、そして「仏」字の異体字として「 onPressed」を載せる。ここから、宋本『玉篇』は「 onPressed」の重複を避けるために、異の隷変字を「 onPressed」から「 onPressed」へ変え、「 onPressed」を「仏」の異体字としたと考えられる。しかし『万象名義』は異の隷変を「 onPressed」としているゆえ、宋本『玉篇』の変化は、唐写本『玉篇』以降に生じたと思われる。

また『万象名義』は異体字を載せるが、これは「 onPressed」の異体字ではなく楷文である。

4.3 「仏」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>万象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>万象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>偏旁</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>看</td>
<td>看</td>
<td>看</td>
<td>看</td>
<td>看</td>
<td>看</td>
<td>看</td>
</tr>
<tr>
<td>聞</td>
<td>聞</td>
<td>聞</td>
<td>聞</td>
<td>聞</td>
<td>聞</td>
<td>聞</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『万象名義』高さ寺本所載の小篆において「仏」字に従うものは、「 onPressed」（1.30 オ）・「 onPressed」（2.11 オ）の二字である。『万象名義』と大徐本の「仏」形は異なっている。しかし大徐本の小篆の「仏」字は異に作り、この字形は『万象名義』の「 onPressed」・「 onPressed」の小篆と一致する。つまり現行の大徐本の中において、「仏」字に従う文字に異同が見られる。また『汗簡』の「仏」字は異に作り（『汗簡』: 78）、中央に一点がある以外は大徐本や夢英と一致する。

おそらく『万象名義』すなわち唐写本『説文』並びに大徐本「仏」字の如き「仏」形が元来の字形と思われる。

4.4 「 onPressed」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>万象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>聞</td>
<td>聞</td>
<td>聞</td>
</tr>
<tr>
<td>活</td>
<td>活</td>
<td>活</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『万象名義』高さ寺本所載の小篆において、「 onPressed」字に従う小篆は「活（活）」（1.18 オ）の一宇である。『万象名義』の当該小篆は、大徐本と合致せず、また磨滅して判別し難い。おそらくこの小篆は「氏」旁の懸針篆の特徴を有していると思われる。

4.5 「野」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>万象</th>
<th>嶂山</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>野</td>
<td>野</td>
<td>野</td>
<td>野</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『万象名義』高さ寺本所載の小篆において、「野」字に従う小篆は「野」（1.38 オ）の一宇である。『万象名義』の「野」字の小篆は「火」字に従う。これは誤写と思われる。
4.6 「朱」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>味</th>
<th>李</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>味</td>
<td>殊</td>
<td>味</td>
<td>味</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺木所載の小案において、「朱」字に従う小案は「味」（2.8 オ）の一字である。『萬象名義』の当該小案は誤写と思われる。

4.7 「月」字（にくづき）

<table>
<thead>
<tr>
<th>味</th>
<th>大徐</th>
<th>味</th>
<th>大徐</th>
<th>味</th>
<th>大徐</th>
<th>味</th>
<th>大徐</th>
<th>味</th>
<th>大徐</th>
<th>味</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>味</td>
<td>殊</td>
<td>味</td>
<td>殊</td>
<td>味</td>
<td>殊</td>
<td>味</td>
<td>殊</td>
<td>味</td>
<td>殊</td>
<td>味</td>
<td>殊</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺木所載の小案において、「月」字（にくづき）に従う小案は「稀」（1.19 ウ）・「壎」（1.23 オ）・「燐」（1.27 オ）・「壎」（1.35 ウ）・「壎」（1.36 オ）・「窩」（1.37 ウ）・「壎」（2.5 ウ）・「暦」（2.10 ウ）・「嘦」（2.12 オ）・「嘦」（2.15 オ）・「窩」（4.2 ウ）・「窩」（4.5 ウ）の十二字である。「月」旁（にくづき）に関して、『萬象名義』と大徐本の間に字形の異同が見られる。

秦隷・漢隷・夢英の『千字文』並びに『偏旁字源解』はみな大徐本と同じく「月」形に従う。『説文』木部残巻に「嵎」字があり、作る（周祖篤 1957：45）。この「月」形の中央の横二画は湾曲しており、あるいは『萬象名義』の「月」形はこの誤謬か。

4.8 「虎」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>味</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>隸変</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>味</td>
<td>味</td>
<td>虎</td>
<td>虦</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺木所載の小案において、「虎」字に従う小案は「褫」（1.18 オ）の一字である。現行の大徐本は「奮」（虎）、山猷之君。従び、虎足象人足。」と云う。また『魏上尊號奏』に虎（虎）があり、顧飾吉氏は「按『説文』作虎。虎足象人足、故下従人。諸碑皆変従巾。無従人者。」と云う（『隸辨』95）。しかし、睡虎地の「虎」字は革（秦 25）に作り、「褫」字は革に作る（『睡虎地』72）。この両字は下部に「巾」形が見られる。この「巾」形は虎の足であり、「止」を顛倒したものである。また戦国・秦文字（珍秦 154）の「虎」字は革に作り、金文の『師西簋』の「虎」字は革に作る（『金文編』334）。これらの字から「巾」形すなわち「止」の顛倒形が虎の足であることに疑いはない。
一方、『萬象名義』や大徐本の「人」形に従う「虎」字は、秦『石鼓文・鑿石』の（虎）や楚『包山271』の（虎）などに由来するだろう。これらの字も仔細に見れば、足の部分は存在する。しかし足分の部分が「人」形に似ていつて、「人」字に挿定されたと考えられる。従って永永元十二年（100）に成書した原本『説文』の段階で、「虎」字の下部が「巾」形と「人」形のどちらに従っていたのか、断定できない。

4.9 「董」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
<th>萬象</th>
<th>小徐</th>
<th>大徐</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>瑕</td>
<td>瑕</td>
<td>瑕</td>
<td>瑕</td>
<td>瑕</td>
<td>瑕</td>
<td>董</td>
<td>董</td>
<td>董</td>
</tr>
<tr>
<td>李千</td>
<td>李千</td>
<td>李千</td>
<td>萬象</td>
<td>大徐</td>
<td>李千</td>
<td>大徐</td>
<td>萬象</td>
<td>大徐</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』等高注本所載の小篆において、「董」字に従う小篆は「玈」（1.22オ）・「玈」（1.30オ）・「董」（1.38オ）・「営」（2.14オ）の四字である。

現行の大徐本（大a）において玈（董）と玈（営）は右旁の「口」形の上に左右の二画が見られる。一方、玈（董）と玈（営）は「口」形の下に左右の二画が見られる。すなわち大徐本の中で字体に異同が見られる。

睡虎地（日甲72）の「董」字は玈に作り（『睡虎地』: 203）、睡虎地（日乙184）の「黄」字は玈に作り（『睡虎地』: 204）。両字は共に上部を「艹」形に従う。この「艹」形は「艹」旁の「艹」と「火」の左右の二点が結合して成った字形である。すなわち、秦隷の時に既に簡略化されていることが知られる。また、『北齊相君銘』の「黄」字は玈に作り、『陳球碑隸』の「黄」字は玈に作り。これに関して陳訓吉氏は、「按『説文』作董、従田英声。董、古文光字。碑省作董。他碑亦作董、或作董。今俗因之。」と云う（『隷辨』: 61）。すなわち、漢隷の時に上述の如く秦隷の字形を継承するものと、『陳球碑隸』のように「火」旁の二点を省いたものの両者が存在する。

『萬象名義』の当該小篆に関しては、玈（董）・玈（董）・玈（営）の三字は「口」形の下に二画がある。但しその字形には異同が見られる。「玈（董）のみは二画を闊くが、これは誤写と思われる。つまり等『萬象名義』の「董」旁の小篆は「口」形の下に二画があると考えるのが妥当である。しかし上述の如く「艹」形は「艹」の下部左右に「火」の左右二点が結合したものであるゆえ、「董」の上部が「艹」であるならば、「口」形の下に二画が存在することは二点の部分が重複することになる。逆に「口」形の下に二画があるならば、「董」の上部は「艹」形であってはならず、「董」形でなければならない。『萬象名義』の四つの小篆でこの点を正確に記しているのは玈だけである。しかしこの小篆は「口」形の下に二画を闊く。秦隷と漢隷が「董」に従っていることを鑑みれば、玈の右旁上部を「艹」にすればよいことになるが、『萬象名義』の他の三字がみな「口」形の下に二画を記す故、「艹」形が原
本『説文』の原型とも考えられ、断定できない。

（嘯）の「美」旁に関して、李陽冰『千字文』の箋（漢）や大徐本の箋（嘯）は右旁下部を「土」に作る。しかし句文『千字文』は箋（漢）に作り、「萬象名義」と一致する。この字体は『頑鼎』の箋（嘯）に見られ（「玉」旁には従わない）、金文に由来することが知られる。

大徐本の「雋」項は「雋、従田従黃省、雋、皆古文雋。」と云い、「雋」項は「雋、従田従黃省、雋、皆古文雋。」と云う。つまり、古文の「雋」字は雋に作り、この字体は上部が正に雋に従っている。ここから、小篆の「雋」字における中央の「口」形は、「口」形が簡略化されて成るものであることが知られる。

４.10 「皿」字

<table>
<thead>
<tr>
<th>万象</th>
<th>小徐</th>
<th>大 a</th>
<th>大 b</th>
<th>書安</th>
<th>文字</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>瓒</td>
<td>瓒</td>
<td>鍵</td>
<td>瓒</td>
<td>瓒</td>
<td>瓒</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『萬象名義』高山寺本所載の小篆において、箋（箋 1.26 ウ）が見られる。『萬象名義』の当該小篆は「皿」旁を皿に作る。この字体は正に「皿」字の小篆と同じであり、後漢の『司徒書安碑』の「皿」字、唐代の『古今文字譜』雲気篆の「皿」字に見られる。一方、睡虎地の秦隷に「皿」形の字が見られ、また『秦南海碑陰』の「盛」字に皿がある（『隷辨』：154）。

「皿」形は秦隷・漢隷の時に既に「皿」形と変わっていることが知られる。現行の大徐本において「皿」字の小篆は「皿」形に作る本と「皿」形に作る本の両者が存在し、問題となる。

４.11 僖（倉・1.64 ウ） 僖（倉・1.76 ウ） 僖（渾/渾・3.19 ウ） 僖（渾・5.102 ウ）

通用字の「幸」について、大徐本の小篆は「幸（帝）、吉而免凶也。従牛従天。（後略）」と云う。また『説文』には別に幸（幸）字があり、「小羊也。従羊大聲。說若達。」と云う。

『義雲章』の「幸」字は箋であり（『古文四声韻』：3.25b）、上部は「文」形に似る。睡虎地（秦 184）の「報」字は箋に作る（『睡虎地』：162）、漢『曹全碑』の「幸」字は箋に作る（『碑別字』：59）。両字は上部を「大」形に従う。また後者は「羊」に横一画を加えて「羊」とする。つまり、「幸（幸）」字の上部の「天」は、秦隷の時に既に「大」形が見られる。

顧藇吉氏は「幸」に関して、「按『説文』帝、吉而免凶也。従牛従天。幸（中略）従大従羊。碑蓋説幸為幸。今俗作幸。『五紬文字』以為幸。經典相承隷省作幸、非是。」と云い、また顧氏は「幸」に関して「按碑銘説幸為幸。幸説若達。小羊也。従羊従天。與帝異。」とも云い、更に「按碑復説幸為幸、以為幸字。」と云う（『隷辨』：112）。瞿令間『岣嶁銘』の箋（箋/箋）字の右旁はまさに「幸」に作る。『萬象名義』の当該四字の内、「倉」・「渾」・「渾」の三字は右旁を「幸」に作り、「倉」のみに「羊」旁を「羊」形とするが、おそらくこれは「倉」の誤写であろう。顧氏の説に従えば、『萬象名義』の四字はみな「倉」に従って

（109）
いるはずだが、後漢の漢隷の時に「傘」に混同した影響を受けて右旁を「傘」としていると考えられる。しかし、少なくとも上部を「大」形に作っていることは、古い形態を留めていると言える。

＜参考文献＞

南朝齐・萧子良『古今篆隷文體』（京都毎日新聞社所蔵、鎌倉時代写）
唐・京兆李懿『古今文字讚』（四天王寺大学所蔵、室町時代写）
宋・徐鉉撰『說文解字繁体』（小徐本）中華書局、1987
宋・徐鉉校定『說文解字』
（大徐本 a）中華書局、1989
（大徐本 b）臧克和・王平校訂、中華書局、2002
宋・郭忠恕・夏竦編『汗簡・古文四聲韻』中華書局、1982
清・顧訥吉撰『古代字書要刊 隸書』中華書局、1985
清・段玉裁注『說文解字注』上海古籍出版社、2001

内藤湖南 1912『弘法大師の文芸』（『内藤湖南全集』9）筑摩書房
周祖謨 1957a『論『篆隷萬象名義』』『漢語音韻論文集』商務印書館
1957b『唐本說文與說文舊音』『漢語音韻論文集』商務印書館
西川寧・神田喜一郎監修 1969『唐 李陽冰 三填記』二玄社
秦公輯 1985『碑別字新編』文物出版社
容庚編著・張振林・馬國権纂補 1985『金文編』中華書局
赤平泰久・田上恵一・菅信雄著 1987『書學大系II・碑法章篇 第一卷 李斯小篆』同朋社
施安昌編著 1987『唐代石刻篆文』紫禁城出版社
福田哲之 1991『『篆隷萬象名義』の篆隷について－『說文解字』との比較を中心に』（『書學書道史研究』）1書學書道史學會

張守中撰集 1994『睡虎地秦簡文字編』文物出版社
商承祚編著 1996『石刻篆文編』中華書局
湯餘惠主編 2001『戰國文字編』福建人民出版社
郭沛 2005『『篆隷萬象名義』反切考』（中山大学博士学位論文）
大柴清圓 2008『『篆隷萬象名義』における俗字の研究（1）－後漢の隷変字から魏晉の草書の楷書化まで－』『高野山大学密教文化研究所紀要』21
大柴清圓 2009『『篆隷萬象名義』における俗字の研究（2）－魏晉から隋唐までの楷書の俗字－』『高野山大学密教文化研究所紀要』22
曹彦傑主編 2011『漢袁安碑・袁敞碑』北京工芸美術出版社
趙力光編 2012『西安碑林名碑精粹 夢英篆書千字文碑』上海古籍出版社
『篆隸萬象名義』小篆研究（大柴）